題目：「時間および不確実性に関する自己および他者のための選択」についての行動経済学的研究

氏名：徳田真佑

指導教員：高橋泰城

Study1： 自己のための異時点間選択と他者のための異時点間選択

【目的】(1)「自己のための異時点間選択（「早くもらえる小さな報酬」と「遅くまで待たないともらえない大きな報酬」との間の選択）」と「他者のための異時点間選択」とを比較し，(2) その相違の心理物理学的原因を検証すること.【方法】北海道大学の学生 24 名（女性 15 名,男性 9 名，平均年齢 19.9±0.47）に対し，異時点間選択課題（「自己のため」と「他者のため」の 2 条件）と時間推定課題（「自己のため」と「他者のため」の 2 条件），および価値推定課題（「自己のため」と「他者のため」の 2 条件）をおこなった．さらに，異時点間選択を物理時間において及び心理時間（時間推定課題において測定されたもの）において分析したものを比較した．また，異時点間選択を客観的報酬量（金額）および主観価値（価値推定課題において測定されたもの）において分析したものを比較した.【結果】(1) 物理時間においては「自己のための異時点間選択」と「他者のための異時点間選択」には相違があったが，心理時間においてはその相違が小さかった.「自己のための異時点間選択」と「他者のための異時点間選択」との相違は，遅延報酬の価値を客観的な報酬量（金額）として分析した場合と価値を主観的なものとして分析した場合とで変化が見られなかった．(2)「自己のための異時点間選択」と「他者のための異時点間選択」との相違の心理物理学的原因は，「自己のための異時点間選択」と「他者のための異時点間選択」のそれぞれにおいて用いられている心理時間が異なることである.【考察】本研究の結果にかんしては，Value Based Account（Loewenstein&Prelec,1992；「割引き方の違い」は「価値推定の違い」に原因があるとする仮説）より Tempospect Theory（Takahashi&Han,2012；「割引き方の違い」は「時間推定の違い」に原因があるとする仮説）の方により説明力があった.

Study2：不確実性に関する自己および他者のための選択

【目的】(1)「自己のための不確実性に関する選択（「確実にもらえる小さな報酬」と「もらえるかが不確実な大きな報酬」との間の選択)」と「他者のための不確実性に関する選択」とを比較し，(2) その相違の心理物理学的要因を検証すること．【方法】北海道大学の学生 28 名（女性 17 名,男性 11 名，平均年齢 20.5 ± 0.88）に対し，不確実性に関する選択課題（「自己のため」と「他者のため」の 2 条件）と待ち時間推定課題（「自己のため」と「他者のため」の 2 条件)，および価値推定課題（「自己のため」と「他者のため」の 2 条件)，および確率推定課題（「自己のため」と「他者のため」の 2 条件）をおこなった．さらに，不確実性に関する選択を待ち時間において及び心理的待ち時間（待ち時間推定課題において測定されたもの）において分析したものを比較した．また，不確実性に関する選択を客観的報酬量（金額）および主観価値（価値推定課題において測定されたもの）および主観確率（確率推定課題において測定されたもの）において分析したものを比較した．【結果】(1) 待ち時間においては「自己のための不確実性に関する選択」と「他者のための不確実性に関する選択」には相違があったが，心理的待ち時間においてはその相違が小さかった．一方「自己のための不確実性に関する選択」と「他者のための不確実性に関する選択」との相違は，価値を客観的な報酬量（金額）として分析した場合と価値を主観的なものとして分析した場合とで変化が見られなかった．また,「自己のための不確実性に関する選択」と「他者のための不確実性に関する選択」との相違は，待ち時間において分析した場合と主観確率において分析したものとで変化が見られなかった．(2) 「自己のための不確実性に関する選択」と「他者のための不確実性に関する選択」との相違の心理物理学的原因は，「自己のための不確実性に関する選択」と「他者のための不確実性に関する選択」のそれぞれにおいて用いられている心理的待ち時間が異なることである．【考察】本研究の結果にかんしては，Value Based Account（Loewenstein&Prelec,1992 ;「割引き方の違い」は「価値知覚の違い」に原因があるとする仮説）や Prospect Theory（「不確実性に関する選択の違い」は「主観確率に原因があるとする仮説」）よりも Tempospect 理論（Takahashi&Han,2012 ;「割引き方の違い」は「待ち時間知覚の違い」に原因があるとする仮説）の方が説明力があった．

《総合考察》 「異時点間選択」と「不確実性に関する選択」の両方において，「自己のための選択」と「他者のための選択」との間に相違があった．「異時点間選択」においては，その心理物理学的な要因は，意思決定の際の主観的価値よりはむしろ，心理的時間であることが示唆された．また，「不確実性に関する選択」においては，その心理物理学的な要因は，意思決定の際の主観価値や主観確率よりはむしろ，心理的待ち時間であることが示唆された．**行動経済学においても，不確実性下の意思決定の問題であっても時間の知覚に着目した研究が必要であると結論できる．**